



TITLE:

王小波・李順の亂の性格：宋代四川 の地主佃戸制との関連において

AUTHOR(S):

島居, 一康

CITATION:

島居, 一康. 王小波・李順の亂の性格：宋代四川の地主佃戸制との関連
において. 東洋史研究 1970, 29(1): 1-29

ISSUE DATE:

1970-06-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/152816>

RIGHT:

東洋史研究

第二十九卷 第一號 昭和四十五年六月發行

王小波・李順の亂の性格

——宋代四川の地主佃戸制との關連において——

島 居 一 康

はじめに

一 反亂の發生と地域的特徴

二 反亂前の四川における土地所有

(一) 宋朝の四川支配と豪民の對應

(二) 豪民——旁戸の役屬關係

(三) 「大蜀國」の限界

三 反亂後の土地所有の展開
おわりに

はじめに

1 は、宋朝による後蜀征服ののち約三〇年を経た太宗の淳化四年（九九三）二月、四川に發生した王小波・李順の亂について、これまでにいくつかの研究がなされている。戦前、重松俊章氏は、貧民と豪民との間における「絶対無差別」を要求

する貧民大衆の反宋朝運動として、この亂に「均産一揆」なる名稱を與えられ、「均産」の思想的背景をも考察された。^①戦後、池田誠氏によってこの亂は唐宋變革期における歴史的意義を有するものとして位置づけられ、四川において、莊園領主制^②が没落し、封建領主制^③（＝地主佃戸制）が展開する轉換期を劃するものである、という見解が出された。

その後、宋代佃戸の身分的隸屬の問題に關する論争の過程で、王小波・李順の亂に加わった「旁戸」と呼ばれる佃戸の評價をめぐって、周藤吉之氏と丹喬二氏との間で對立する見解が生じ、この亂の性格についてもそれぞれの立場からの言及がなされている。丹氏は、『成都文類』卷三九、楊天惠の「正法院常住田記」に見える佃戸の成長のあとから、「旁戸」的農民の成長過程を論證されようとした^④が、考證に難點があり、周藤氏の反論がなされ、周藤氏は、四川の佃戸は北宋時代を通じて豪民の強い隸屬下にあり、王小波・李順の亂に「旁戸」が無條件に参加したと見るのは問題である、とされた^⑤。また柳田節子氏は周藤氏の立場をふまえつつ、この亂の性格を、宋代における「先進型」・「邊境型」二つの土地所有形態のうち、後者すなわち「邊境型」に屬する四川の佃戸（＝旁戸）の抵抗運動として規定しようのではないかと、とされた^⑥。最近、王小波・李順の亂を扱ったものとして佐藤和弘氏と中村健壽氏の論考があり、佐藤氏はこの亂を豪民と「旁戸」との同盟關係にもとづく反宋朝運動として規定され、中村氏は反亂集團の構成が段階的に變化する過程で「旁戸」の参加が行なわれたのではないかと、とされている^⑦。

本稿はこれらの研究成果をふまえて、宋朝政權確立期における四川地域の變革の過程にこの亂を位置づけ、從來行なわれてきた論争に關して筆者なりの一定の見解を述べつつ、宋代四川の地主佃戸制の展開過程とも併せて再検討を試みようとするものである。^⑧

一 反亂の發生と地域的特徴

「我疾貧富不均、今爲汝均之」と叫んで王小波らが亂を起したのは淳化四年（九九三）二月、成都の西方、蜀州青城縣

においてであった。^④かれらが立ち上った直接の理由は、蘇轍の『欒城集』卷三六、論蜀茶五害條に

牟利之臣、始議措取、大盜王小波・李順等、因販茶失職、窮爲剽劫、

とあるように、宋朝による榷茶の實施がもたらす失業を恐れたことにある。四川における榷茶の開始は實際には熙寧七年（一〇七四）のことであり、淳化四年に榷茶が實施されたわけではないので、茶の生産と販賣とで生計を營んでいた王小波・李順らは、この段階では宋朝による榷茶實施がかれらの生計を全面的に破壊することを恐れて決起したものと思われる。

亂の發生前における四川地域の經濟狀態については次章でふれることとし、ここではまず、宋初における四川の茶業の實態を把握し、次いで茶產地と王小波・李順の亂の發生地域との關連性を見ることとする。

周知の如く、四川においては唐代にすでに茶栽培がかなりの規模で行なわれており、後蜀政權下においては重要な財源として榷茶が行なわれていたらしい。^⑤後蜀の滅亡後、宰相母昭裔の子守素は「その成都の莊產茶園を籍し」て宋朝に獻じたという^⑥。宋太宗の開寶六年（九七三）、全國にさがけて四川に頭子錢の徵收が行なわれた際には、茶一斤につき一文の比率で加徴がなされている。^⑦産額自體は、すでに榷茶が行なわれていた東南地方に比べるとそれはど多くはなかったらしいが、生産者たる農民にとっては死活にかかわる重要な商品作物であった。

呂陶の『淨德集』卷一、奏具置場買茶施行出賣遠方不便事狀は、熙寧の榷茶實施に對する呂陶の反對意見を述べたものであるが、反對理由の一つとして

今川蜀茶園、本是百姓兩稅田地、不出五穀、只是種茶、〔註略〕賦稅一例折科、役錢一例均出、自來採茶貨賣、以充衣食、

とあり、茶園が本來「百姓兩稅田地」であって、生産者は茶の販賣利益に生計を全面的に依存する專業戸であり、茶で税・役を負擔していたことがわかる。このようなかれらの生活が、貨幣經濟の深い影響下に置かれていたことは言うまでも

ない。

ところで、宋初の四川において、茶の栽培が行なわれていた地域は、成都附近のごく限られた一帯であることに注目したい。まず、『太平寰宇記』により、國初の四川諸州のうち、その「土産」の項に茶を擧げているのは成都府、彭州、眉州、邛州、蜀州、簡州、雅州、巴州である。巴州を除く各州が、成都府路、とりわけ江水流域に集中していることがわかる。このような茶生産の地域的特徴は、約一世紀後の熙寧七年（一〇七四）、四川に榷茶が実施されて以後、買茶場が設置された諸州を見ても明らかである。『宋會要輯稿』（以下、『宋會要』と略稱）、食貨二九、買茶場の項によると、成都府、眉州、蜀州、彭州、邛州、雅州、漢州、綿州、嘉州、興元府、洋州、文州となっており、『太平寰宇記』に載せる國初の産茶地域とはほぼ一致する。蘇轍の『樂城集』卷三六、論蜀茶五害條に「益・利路、所在有茶、其間邛・蜀・彭・漢・綿・雅・洋等州・三泉縣人戶、以種茶爲生」といい、或いは劉贊の『忠肅集』、卷五、論川蜀茶法疏に「蜀地陋、而出茶所、不過十數州耳、始時、人賴以爲生」というような、これら諸州の生産の特殊なあり方に注目したいと思う。

ところで茶生産の実態について見ると、前掲の『淨德集』の同狀に

茶園人戶、多者歲出三五萬斤、少者只及一二百斤、

とあり、戸ごとの産茶額には數百倍の開きがあったことをうかがわせる。このことは四川の茶生産において、榷茶実施以前、大經營と中小經營とが併存していたことを示している。同じく『淨德集』卷一、奏爲官場買茶虧損園戶致有詞訴喧鬧事狀には、彭州九隴縣の稅戶、黨元吉が「自來相承山竊茶園等業」と自ら述べており、また同狀には同じく稅戶、牟元吉が「自來只以佃食茶園爲業、其茶園偏峻、不任種植諸般苗色、逐年舉人上債利糧食、雇召人工、兩季薅剗」と述べていて、「兩稅田地」である茶園が父祖から傳えられた世業の地であり、季節労働者を雇っていた例もあったことがわかる。また、『長編』卷二八二、熙寧十年五月庚午の條には、

壩口（青城縣にある）茶園三百餘戶、凡五千人、賣茶赴場、

とあって、茶園戸は種茶実施當時、一戸あたり十數人の家族（雇傭労働者を含むか）を養っていたようである。これは茶業労働の集約性にもとづくものと思われる。

以上のように、四川においては唐代以來、成都附近のごく限られた地域において、茶の栽培が行なわれており、宋朝による種茶実施以前、茶園戸の經營規模にはかなりの差が生じていること、また茶園戸は茶を販賣して錢を得、税・役も茶で負擔し、その生計はもっぱら茶に依存していたこと、が明らかである。ちなみに、『太平寰宇記』に載せる産茶諸州の主客戸數と、元豐九域志に載せる産茶諸州の主客戸數とを検討してみると、まずいずれの州も主戸數が客戸數の二倍から五倍に及ぶ、四川四路のうちで最も主戸率の高い地域であることがわかる。また、ほぼ一世紀をへだてながら、客戸數の増加が緩慢で、中には眉州の如く減少している州もあり、逆に主戸數の増加が著しいこと、が特徴的である。^⑤この間に王小波・李順の亂が発生しているのであるが、これらの諸州が、四川の中でも最も古くから開發が進み、宋初においては主戸率の高い、いわゆる「狹郷」に屬していることは論をまたない。

さて、「販茶失職」の事態に追いつめられ蜀州青城縣で亂起した王小波らは、はじめ「衆才百人」であったといわれる。^⑥かれは眉州彭山縣令齊元振を殺し、「均貧富」の実行を開始したが、十カ月後の淳化四年十二月、蜀州江源縣で巡檢張圻と戦闘を行ない、その時の傷がもとで戦死し、かれの妻弟李順が反亂集團の首領となった。この間の事情に關しては沈括の『夢溪筆談』卷二五、雜誌二に

始王小博（波）反于蜀中、不能撫其徒衆、乃共推「李」順爲主、

とあり、王小波と李順との間における集團の統率をめぐる意見の對立を讀みとることも可能である。『夢溪筆談』によれば、李順はすでに「孟氏の遺孤」として後蜀の再興をめざしていたらしい。

王小波が亂起してよりほぼ十カ月、蜀州・眉州付近にとどまっていたのに對し、李順が主領するようになると、「旬日

之間、衆及數萬」というように反亂集團は急速に擴大した。李順は十二月のうちに蜀州・邛州・永康軍を陥れ、蜀州では監軍の王亮及び官吏十餘人を殺し、邛州では知州の桑保仲・通判の王從、及び諸幕吏を殺し、巡檢の郭允能を戦死させた。ついで蜀州の新津・成都府の溫江・郫の兩縣を焼き拂い、占據地に要員を残留させつつ、成都とへ進攻し、一旦退いたあと漢州・彭州を攻掠し、翌淳化五年（九九四）正月、再び成都を攻めて知府郭載を梓州に敗走させた。成都に入城した李順は自ら「大蜀王」と號し、「應運」と改元し、宋朝支配からの獨立を宣言した。同時に軍勢を四方に派遣し、特に要隘の地である劍門・梓潼には楊廣・相申貴の二人にそれぞれ十萬餘の集團を率いさせて守りを固め、巫峽にも部隊を派遣した。この間約一カ月である。

「大蜀」建國までの段階で特徴的なことは、亂が成都附近の產茶諸州で發生し、反亂集團がそれら地域の農民を中心に構成され、特に李順が指導するようになるとわずかの期間で數十萬の規模に擴大した、という點である。反亂發生の理由であった「販茶失職」の危機が王小波のみならず、この地域の農民を急速に結集させることとなったのは、宋朝州縣官が攻撃された諸州のほとんどが產茶地と重なっていることから明らかである。反亂發生地域と產茶地との一致は單なる偶然ではない。また、劍門・巫峽へは部下を派遣したのであって、それらの地域で反亂が發生したのではない。このことがこの反亂の第一の特徴點である。

ところで「孟氏の遺孤」として正統性を主張する李順が率いるようになった反亂集團が、わずか一カ月の短期間で數十萬の勢力にふくれあがり、「大蜀國」を建てるに至ったのは、沈括の言うようにただ「此時蜀中饑」という理由にのみものとづくのであろうか。理由は他にもあったようである。

二 反亂前の四川における土地所有

『宋太宗實錄』卷七八、至道二年（九九六）八月丙寅の條には、豪民との間に數世にわたって役屬關係を結んでいる

「旁戸」なる農民が四川にいたことが見える。そうして上言者は、豪民がこれら「旁戸」を嘯聚して亂を起そうとしている、と述べている。これと同内容の記事は『宋史』卷三〇四、劉師道傳にも見え、そこでは李順の亂にあたり、「旁戸」が鳩集した、となっている。周藤氏は豪民の役屬下にある「旁戸」たちが自ら結集することはありませんし、佐藤氏も『宋太宗實錄』の記事が正しく、劉師道傳の記事は誤りであるとされているが、兩資料は同じ事實を傳えているのであるから、問題はどちらが反亂の主導權を握ったか、という點にあるのではなく、むしろ豪民が數世にわたる役屬下にある旁戸とともに反亂に加わったという事態そのものに意味があるように思われる。ここで兩資料を次に掲げる。

〈宋太宗實錄卷七八、至道二年八月丙寅〉^⑥

詔、制置劍南・峽路諸州旁戸、先是、巴蜀民以財力相君、每富人家、役屬至數千戸、小民歲輸租調、亦甚以爲便、上言者以爲、蜀川兆亂、職豪民嘯聚旁戸之由也、遂下詔、令州縣檢責、俾鄉豪相統駁三年、能肅靜寇盜、民庶安堵者、並以其豪署州縣職、以勸之、遣職方員外郎時載・監察御史劉師道、乘傳齎詔書諭旨、既而載等復奏、旁戸素役屬豪家民、皆相承數世、一旦更以他帥領之、恐人心遂擾、因有他變、上然之、其事遂寢、

〈宋史卷三〇四、劉師道傳〉

川峽豪民多旁戸、以小民役屬者爲佃客、使之如奴隸、家或數十(千)戸、凡租調庸斂、悉佃客承之、時有言、李順之亂、皆旁戸鳩集、請擇旁戸爲三者長、迭主之、疇歲勞、則授以官、詔師道、使兩川議其事、師道以爲、迭使主領、則爭忿滋多、署以名級、又重增擾害、廷奏非便、卒罷之、

この兩資料をめぐる從來の論争においては、(1)「小民歲輸租調、亦甚以爲便」「凡租調庸斂、悉佃客承之」とある租を兩税と見るか小作料と見るか、(2)「旁戸」が耆長(三大戸)たり得るかどうか、という二點を中心に、「旁戸」の中に鄉村の三大戸たりうる有力農民として成長したものがいたのかどうか、が問題とされてきた。この解釋のちがいは、王小波・李順の亂の性格にかかわるのみならず、四川における「旁戸」的農民を宋代地主佃戸制の展開の中にどう位置づけるかと

いう點において、さらには宋代佃戸の「身分的隸屬性」の問題として、いまだに結着を見ない宋代史研究における永年にわたる論争の一部分を構成している。本章ではこの「役屬」がどのような過程を経て形成され、王小波・李順の亂にいかなる役割りを果たし、また、それがこの亂の性格とどうかかわるのかという問題を中心に考察することとしたい。

(一) 宋朝の四川支配と豪民の對應

先の資料に見える豪民と旁戸との關係で最も特徴的なことは、「旁戸素役屬豪家民、皆相承數世、一旦更以他帥領之、恐人心遂擾、因有他變」といい、或いは「迭使主領、則爭忿滋多、署以名級、又重增擾害」という時載や劉師道らの指摘であろう。四川における宋朝の支配が始まって約三〇年を経た時點において、「相承數世」であるということは、かれら旁戸の豪民への役屬が、後蜀時代以來繼續していることを示している。この役屬關係は後蜀から宋への移行期において、どのような展開を遂げてきたのであろうか。しかも上言者の指摘する「蜀川兆亂、職豪民嘯聚旁戸之由也」或いは「李順之亂、皆旁戸鳩集」が全くの虚構でない限り、かれらはこの役屬關係によって結ばれつつ、王小波・李順の亂に主體的にかかわっているのである。

このような役屬關係によって結ばれた豪民―旁戸のあり方を、莊園領主制における領主と農奴との關係としてとらえたのは池田氏であった。^⑧

池田氏は、後蜀時代の支配階級であった莊園領主は、宋朝治下で政治的に反宋朝化し、他方では宋朝州縣官と結んで貧民からの收奪を強化しながら新しい生産様式―封建領主制(地主佃戸制)を展開させる兼併家の成長があり、ついに茶商王小波らの蜂起におされて舊支配層たる豪民も旁戸とともに亂に加わったとされる。氏によると宋初の四川には新舊二類型の豪民が、それぞれの生産様式の上で政治的に對抗しており、亂に加わったのは自己の舊支配者としての政治的特權的位置を引き下げてまで農民たちと同盟した莊園領主であり、亂によって古い生産様式―莊園領主制―が否定さ

れ、新しい生産様式——封建領主制——が展開してゆく、という圖式が設定されている。

これに對し佐藤氏は、池田氏が宋初四川の豪民をその生産様式によって新舊二類型に分けた點を批判しつつ、在地の豪民と外來の豪民という二類型を設定し、在地の豪民と農民との結びつきの基盤を、唐末における土豪の率いる民兵組織——義軍——に求め、宋初、經濟的に強大化していった在地土豪が義軍内部でその支配的地位をますます強化したにもかかわらず、宋朝支配下で完全に支配階級として認められないという二重性が、亂によって解消され、亂後の武裝解除によって民兵組織が宋朝の手で解體され、新たに土地を媒介とする關係へと變化していった、とされる。

池田氏の場合は「莊園領主制」とそれを否定して展開してゆく「封建領主制」の概念規定を明確にしないままで論が展開されており、佐藤氏の見解に關しては、後蜀から宋初にかけて、義軍内部で支配的地位を強化していったという豪民の存在が檢證されておらず、また、經濟的に強大化した豪民が、氏のいう在地の豪民なのか外來の豪民・商人たちなのかはつきりしない。それに、「土地を媒介とする關係」が亂後における武裝解除を始めて展開してゆく、という説明も理解しがたい。

しかし、唐末以來の四川における在地土豪の義軍組織が、兩蜀軍閥政權下において、さらには宋朝治下においてどのように展開していったか、という問題は、王小波・李順の亂の性格を規定する際に重要な意味を持つと思われるので、ここではまずこの問題について検討を加えることとする。

四川における在地土豪の率いる義軍の活躍については、史料に見える限り、唐最末期において顯著であり、この時期に關してはいくつかの研究がなされている。^③しかし前・後蜀政權下において、或いは宋朝支配開始後において、義軍を率いる在地土豪たちがいかなる状態におかれていたかについては、まだ充分に明らかにされているとは言えない。

義軍は中國史上しばしば現われる。しかしその組織は本來完結した權力機構として形成されてはおらず、時の支配權力

—唐末にあっては藩鎮權力—の末端を形成することによって土豪の在地支配を補完強化する性格を持っている。唐末四川の動亂期に、千ないし萬の兵を擁して王建に協力した綿竹(漢州)の土豪何義陽や安仁(同)の費師勲ら、或いは郷兵數千を率いて軍職に補せられた瀘州の土豪趙師儒、或いは資州の土豪韋君靖などの例がよく知られているが、土豪たちは軍閥權力の軍事的支配機構の一部を構成して始めて郷村の在地支配を確立し得るのであって、一旦軍閥政權の支配が開始されると、義軍組織は一方では軍閥兵力の補助機關となり、他方では土豪の在地支配の機構に轉化するものと思われる。

後蜀政權はわずか二カ月の抵抗ののち宋朝に屈服し、舊蜀兵の精銳は再編成され、後蜀官僚・將校らとともに開封へ送られた。その護送の途次、綿州で舊指揮使全師雄は自ら「興蜀大王」と號し、諸州に殘留する舊蜀兵が呼應して兵亂が起つた。この時期には「群盜」と稱される流民たちや「夷獠」など邊境地帶の異民族の反亂が発生しているのが特徴的である。しかし同時に「族三百餘口を擧げて」これらと戦い、宋朝軍司令官王全斌から「義軍都指揮使」に任命され、次いで黎州・雅州(成都西南方)の都巡檢使となつた曹光實の例が見られる。曹氏は唐末以來、雅州の武人の家柄であり、後蜀の孟昶から「永平軍管內捕盜遊兵使」に補せられていたが、宋朝による四川征服が開始されるやただちに義軍を率いてこれに協力し、やがて太祖から黎州刺史を授かつた。また、漢州綿竹縣(成都東北方)で「家世豪富」であつた楊允恭は「郷里子弟」を率いて「群盜」と對抗し、宋朝軍に獻策して「綿漢招收巡檢使」に補され、やがて「殿前承旨」を授かつた。他方「興蜀大王」全師雄に應じた豪民の例は、今のところ檢出し得ない。この二例をもつて、後蜀時代の豪民がすべて宋朝に協力したと斷定することはできないにしても、これらの例は、後蜀時代には在地で一定の支配的地位を保ち、そのことによって「郷里子弟」を結集しうる基盤を持っていた豪民が、時の權力の交替・移行にきわめて敏感に反應し、義軍を組織することによって郷村を防衛するとともに、郷村における支配的地位の維持をはかろうとする傾向をも示している、とは言えないだろうか。すなわちすでに土地を媒介として成立していたであろう郷村における豪民と一般農民との間の一定の擯取・被擯取の關係は「郷里保全」のために結集した郷村の農民たちを義軍に組織し、義軍を率いる豪民が權力

からの保證を得ることにより、ふたたび安定するのである。このことは一般に、豪民自らの在地支配が動搖し不安定になつてゐる時期にこそ在地支配を安定させるために義軍組織が必要とされ、鄉村での支配的地位が安定してゐる時期には義軍組織を動員する必要がないことから言える。

ところで、この時期における豪民と權力との對應關係を別の角度から見ると、『九國志』卷七、後蜀、保寧軍節度使張公鐸傳に

先是、屬邑連歲多逋租、公鐸詰其由、乃豪民猾胥、乾沒賦稅、時令佐已有授代者、公鐸悉勒止之、令盡徵其租而後解、由是不數日徵錢糧數萬貫斛、

とあり、佐藤氏は「乾沒賦稅」を豪民による一般農民からの收奪であると解されているが、これは豪民が胥吏と結んで後蜀への賦稅納入を怠つてゐる事態を述べたものである。この記事は後蜀の孟昶時代のものであるが、後蜀滅亡の後、宋朝支配開始直後の開寶四年（九七二）には、『宋會要』食貨二〇、賦稅雜錄に、閬州通判路冲の言として、

當州稅租、多違日限、蓋本州曹吏、倚以形勢、遷延不納、又有一戶庇三戶者、於本廳別置形勢版簿、令本官每日躬親入鈔、

とあるように、後蜀時代に保寧軍節度使の管内であつた閬州において、豪民と胥吏との結託による稅租の「遷延不納」が問題とされている。この兩資料は同じ地域の同じ豪民が、後蜀政權下においても宋朝政權下においても、權力からの收奪に對して同じ對應をしていることを示している。ただし後蜀が宋に變つた段階で、ここに見る豪民は「形勢戶」として通判によつて直接掌握されることになる。「本州曹吏」というのは後蜀時代以來の閬州の胥吏であつて、「豪民猾胥」と併稱されている如く、在地土豪の勢力下に置かれてゐるか、或いは豪民そのものか、どちらかである。宋朝支配下に入つてのちこの豪民は何らかの官品を得、その權勢で曹吏と結託して稅租納入を怠つたのであらう。このころの四川では後述の如く戸等制にもとづく職役負擔は貫徹していないから、州縣の事務は後蜀時代以來の胥吏や牙校の手で行なわれていたと

思われる。

ところで四川全體を見ると、從來から指摘されているように宋初における科擧登第者は極めて少ない。『宋史』卷二九三、張詠傳には、かれが王小波・李順の亂の鎮定の後に知益州として成都に赴いた際の措置が述べられているが、その中に「初蜀士知向學、而不樂仕官」とあり、このような指摘は他にも數多くある。四川の豪民の宋朝への政治的對應が宋初において他地域と比べて全體的に遅れていた理由はどこにあったのであろうか。それはまず、宋初における四川地域の經濟環境の急激な變化に求めることができる。

當時、宋朝は四川をその版圖に加えたのち、九七一年には江南・南漢、九七五年には南唐、九七八年には吳越、九七九年には北漢をそれぞれ滅亡させて中國統一を完成し、さらには契丹との戰鬪も行なわれるなど、軍事的統一の完成期に當っており、四川の富は最大の收奪對象とされた。さらにこの間、四川は全國的な銅錢經濟に巻き込まれることにより、後蜀時代に成立していた鐵錢による地域經濟圏が崩壊してゆく中で、豪民たちはまずその經濟力において、後蜀時代に一定の安定を見ていた自らの在地における支配的位置を次第に低下させていったようである。

『長編』卷一五、開寶七年（九七四）秋七月の條には、

川峽鹽承僞制、官鬻之、於是詔斤減十錢、以惠遠民、

とあり、後蜀時代の鹽の專賣制を宋朝は繼承したのであるが、同じく『長編』卷一八、太平興國二年（九七七）、夏四月辛卯朔の條に

右拾遺郭泌言、劍南諸州官鹽、斤爲錢七十、豪民黠吏、相與囊橐爲奸、賤市於官、貴糶於民、斤爲錢或數百、望稍增舊價、須爲百五十、則豪猾無以規利、而民食賤鹽矣、從之、

とあり、豪民が官鹽を買い占めて高價で賣りつけているので、官鹽の價格をほぼ倍増したことを示している。佐藤氏はこのような豪民は外來の豪民であつたとされるのであるが、あえて區別する必要はないと思われる。この記事はまず最初に

宋朝による四川からの全般的な收奪の強化の點を讀みとるべきであつて、四川全體の經濟の動きの中で豪民の位置を定めなければならぬと思われる。

『長編』卷二三、太平興國七年（九八二）八月戊寅の條には、

僞蜀廣政中、始鑄鐵錢、每鐵錢一千、兼以銅錢四百、……尋又禁銅錢入川界、鐵錢十乃直銅錢一、太平興國四年、始開其禁、令民輸租及權利、每鐵錢十納銅錢一、時銅錢已竭、民甚苦之、商賈爭以銅錢入川界、與民互市、每銅錢一得鐵錢十又四、

とあり、太平興國四年（九七八）に、後蜀時代鐵錢行使地域であつた四川が銅錢經濟の中に開放されたことを示している。さらに四川の地域經濟圏の破壊は、淳化元年（九九〇）八月の布帛の市場統制によつて決定的となる。『宋會要』食貨六四、淳化元年八月の詔に

川峽諸州、官歲市絲綿紬布絹帛等、不能充舊實、蓋賈人利市侵其利、自今嚴禁之、限詔到、賈人所市者、悉送所在官、官以市價償之、藏匿者實於法、

とあり、また『皇朝編年綱目備考』卷四、淳化四年二月己未の條には、王小波・李順の亂の發生理由を述べて、

成都常賦外、更置博買務、諸郡課民織作、禁商旅不得私市布帛、司計之吏、析及秋毫、

というように、四川の重要な産業である布帛は、宋朝の直接收奪下に置かれることとなつた。宋朝が次いで手をつけようとしたのが茶であつたことは前章で見たとおりである。

從來この時期の經濟狀態は、豪民が宋朝州縣官と結託して暴利をむさぼり、一般人民をますます貧困化させたという面だけが強調されているようであるが、商業利潤を排するという形で行なわれてきた宋朝の一連の經濟政策の中で、富を蓄積し得たのは「析及秋毫」というような宋朝州縣官であり、豪民自體かれらの收奪對象であつたことを考慮に入れなければならぬ。また『宋會要』刑法二、禁約、淳化五年（九九四）二月二十六日の條には、

詔劍南諸州、民爲州縣長吏、建生祠堂者、宜禁之、先是、官吏有善政、部內豪民、必相率建祠宇碑頌、以是爲名、因而
 培植、小民患之、帝知其事、故降是詔、

とあり、これは李順の成都入城直後に出された詔であるが、宋朝權力を背景に四川に臨む州縣官の「善政」を願う豪民が、郷村内でその影響下にあると思われる小民たちを率いて祠堂を建立し、その費用をかれら小民から徴収している、という事態を述べている。ここには州縣官の意向に左右されつつ、郷村における地位を利用して小民からの收奪を強化し、そのことによって小民たちとの對立をまねくという、矛盾した位置に置かれた豪民の姿がある。

(二) 豪民—旁戸の役屬關係

さて、豪民は旁戸とともに王小波・李順の亂に加わったのであるが、かれらは兩者の間にある數世にわたる役屬關係によつてつながっていた。しかし豪民と旁戸の役屬關係は、豪民の經濟力の相對的低下に伴つて、旁戸からの收奪を強化し、或いは自らの負擔を旁戸に轉嫁するなど、宋初の經濟危機の中で一定の動搖をきたしていたと思われる。この點については後にまたふれることとするが、李順の亂に際し、豪民たちは「旁戸」を含むであろう郷村の農民たちを民兵集團に組織してこれに加わったようである。『長編』、卷四六、咸平三年（一〇〇〇）春正月乙未の條に

初、知蜀州・供奉官・閤門祗候楊懷忠、聞成都亂、卽調郷丁、會諸州巡檢兵、刻期進討、蜀民不從賊者、相率抗禦、自謂清壇衆、懷忠又擇清壇衆之魁七十餘、悉補巡檢、とある。ここに言う「賊」とはこの年に成都で反亂を起こした都虞候王均の集團を指している。この亂は數千人程度の兵亂であつて、李順の亂のように大規模なものではなかった。この記事は、王均の亂に加擔しない農民たちが自ら「清壇衆」となつて王均の集團に對して「相率抗禦」していたので、知蜀州の楊懷忠がその「魁七十餘」を擇んで巡檢に補した、というものである。これは翌日の丙午の條には、

懷忠兵勢不敵、引衆退保江原、懷忠所調丁夫、多李順舊黨、頗貪剽劫、故致敗績、とあって、楊懷忠が集めた農民の多くが、「李順の舊黨」であり、そのために敗れた、といっている。蜀州は王小波・李順の亂の發生地であり、「清壇衆」を構成する農民も同じく李順の亂に加わっていたと思われる。

ところで「清壇衆」の意味は何であろうか。『長編』には説明がなされていないが、『資治通鑑』卷二五五、中和四年三月の條の胡註に、「則壇丁者、蜀中邊郡民兵也」とあり、壇というのは四川における傳統的な民兵集團を指す言葉である。『九國志』卷七、後蜀、石處溫傳には、前蜀の時に利州司馬であった石處溫が、孟知祥の入蜀に際し、「萬州管内諸壇、點檢指揮使」に補され、義兵を率いて峽路を收めた、とあり、壇が四川における義軍の一團を指したことはたしかである。「清壇衆」とは王均の亂に當り、付近の農民たち自らが郷村を防衛する目的で組織した民兵集團であった。この統率が、豪民の手によって行なわれたであろうことは他の義軍の例から見て、この場合にもあてはまると思われる。楊懷忠が擇んで巡檢に補したという「魁七十人」はそういった郷村の有力農民であつたに違いない。

このように、「清壇衆」の例は、王均の亂に當たつて宋朝がこれを利用し、亂の鎮定に利用しようとしたものであるが、王小波・李順の亂の場合にも宋朝は同じような對應を示した。それは先に見た劉師道傳によれば、「擇旁戸爲三者長、迭主領之、歲疇勞、則授以官」という對策である。しかしこの對策は「蜀川兆亂、職豪民嘯聚旁戸之由也」「李順之亂、皆旁戸鳩集」という上言者の指摘をふまえるならば豪民・旁戸一體となつて反亂を起こしているのであるから、宋朝としては統率者を交代させて内部からこれらの結束を破壊しようとしたと思われる。この對策は實行には移されず、反亂鎮定後、宋朝は豪民による旁戸の統制を承認している。實行しえなかつたのは豪民と旁戸の間に數世にわたる役屬關係があり、この關係を破つて旁戸を耆長にするとさらに問題が起るであろう、という時載や劉師道の指摘による。このような經過が示すものは、王小波・李順の亂の發生から鎮定に至るまで、豪民―旁戸間にはこの統制關係をくつがえすような事態が發生していない、という事實である。しかも『宋太宗實錄』によるならば旁戸の中には耆長となすに足る「鄉豪」が

いたのであって、これは「旁戸を嘯聚」した豪民とは別の豪民であると見なければならぬ。なぜならば同じ『宋太宗實錄』には「一旦更以他帥領之、恐人心遂擾、因有他變」と言っており、「郷豪」は豪民にかわる他帥として扱われているからである。周藤氏は「郷豪」と豪民とは同じであり、宋朝の四川支配開始直後から郷村の捕盜を掌っていた耆長であるとされているが、後に見るようにこれには疑問があるし、また『宋太宗實錄』の記事そのものについて見ても、郷豪を「他帥」と言っている以上、これが旁戸の中にいる三耆長たりうる郷村の有力農民を指していることは間違いない。劉師道傳では、明らかに「擇旁戸爲三者長、迭主之」と言っているのである。したがって宋朝の對策が實行に移されなかったのは、周藤氏が言われるように、旁戸が小民であつて奴隸の如く使役され、豪民には小作料のみを納める客戸であつたら旁戸を耆長にできなかった、という理由に基づくのではなく、豪民と旁戸との間に、郷村において利害を共通にする強固な結束が生じていたことに基づくものと思われる。しかも、前章で見たように、王小波・李順の亂の發生した地域は成都府路の產茶諸州である。兩税を負擔する豪民に數千倍する無税の客戸の存在を、この時期の成都府路に求めることは不可能である。旁戸と豪民の間に租佃關係が存在していることは事實である（「小民役屬者爲佃客」）が、小民、奴隸、役屬等の語を文字どおりに受けとめることには問題があるであらう。前章で見たように、茶生産においてその經營規模にはかなりの差があつたが、生産者たる農民はほとんど茶によつて兩税・科役を折納し、現金收入を得て生計を營む主戸である。さらに當時の成都府路の產茶諸州は、表現に若干の誇張はあるにせよ、茶の單一栽培地域と見てよい。王小波・李順の亂の發生理由とその波及地域の特質をふまえた上で、豪民―旁戸の強固な結束をもたらした原因をさぐるとすれば、「販茶失職」という共通の危機意識であるとともに、「貧富不均」の狀況をもたらした宋朝州縣官との對決であり、閉鎖的な地域經濟圈の中で比較的安定した秩序を保っていた後蜀時代の再現であつた。「孟氏の遺孤」なる李順に對し、豪民・旁戸が結束してこれに應じていった過程は、かつて唐末において、或いは宋初において、豪民が郷村で組織した義軍を率いて、新たな權力に對應した事態と極めて類似している。李順らがわずかの期間に數十萬の集團に膨張し、「大蜀」

建國を行なった原動力は、一つにはこの「清壇衆」のような民兵集團に求めることができれば。

後蜀軍閥政權時代の遺制は、四川においては宋初かなり遅くまで維持されており、藩鎮體制の末端を形成していた「鎮將」が鄉村において前代以來の權限を行使し續けている。鎮將は衙前將吏として藩鎮體制解體後は城郭内の捕盜を掌ることとし、鄉村の捕盜は耆長にやらせるというのが宋朝の方針であったが、四川においては、『長編』卷六一、景德二年（一〇〇五）八月庚寅の條に

令益・梓・利・夔諸州營內鎮將、不得捕鄉村盜賊・受詞訟、

とあり、十一世紀に入つてなお四川全域において鎮將が鄉村の捕盜を掌っていた。鎮將の多くは在地の豪民であつたら、かれらは鄉村に根強い基盤を有していたと思われる。四川においては鎮將による鄉村の警察機能が宋初以來維持されており、鄉村の上等戸の中から三大戸をえらんで耆長となし、これに鄉村の捕盜を行なわせる、といった宋朝の政策は貫徹していなかつたようである。

周藤氏は、四川においては豪民が後蜀滅亡の直後から耆長となつて鄉村の捕盜を行なっていたとされ、その根據として『長編』卷七、乾德四（九六六）年冬十月己巳の條に

詔諸州長吏、告諭蜀邑令尉、禁耆長・節級不得因徵科及巡警、煩擾里民、規求財物、

とある「蜀邑」を四川の諸縣というふうに解しておられる。しかしこの詔文は、最初に「諸州長吏」という規定があることからして、「蜀邑」は「屬邑」の誤りであるとしか考えられない。しかも宋朝は翌乾德五（九六七）年四月に四川地域における宋の刑統・編敕の邊守を申明しており、開寶四年（九七一）正月になつても「四川諸州、未嘗徧行條約」という状態であつた。後蜀征服の直後に、四川の各縣に宋朝の政策にもとづいて耆長が置かれ、鄉村の捕盜・徵税を掌つたとする説には従えない。四川において、戸等制にもとづいて耆長が設置せられるようになったのは、この景德二年の詔が出されて以後ではなからうか。

以上のように、十世紀末において四川に藩鎮時代の遺制が存在しており、また「清壇衆」の如き民兵團が組織されていたことは、宋初四川の地域經濟圏が崩壊する中で經濟力の低下をきたした豪民たちが、「孟氏の遺孤」と稱する李順に應じ、鄉村においては「旁戸」などの農民を民兵團に組織して統率しうる基盤が存在していたことを示すものと思われる。

「録用材能、存撫良善、號令嚴明、所至無一所犯、……所向州縣、開門延納、傳檄所至、無復完壘。」という李順軍の進撃の有様は、この反亂集團がかなり統制されて動いていたことを物語っている。

しかし一見強固に見える義軍的結合も、その内部においては宋初以來、新たな事態が進行していた。宋朝支配後に急速に進行した四川の全般的經濟危機と平行して、「財力を以て相君」する四川の「富人」と「小民」の間には、土地所有權をめぐる争いが展開していた。

『長編』卷九、開寶元年（九六八）六月癸亥の條に

西川及山南諸州百姓、祖父母父母在者、子孫多別籍異財、詔長吏申戒之、違者論如律、

とあり、ここには四川支配開始の三年後、舊後蜀支配地域において「別籍異財」即ち「別家營業」が多く行なわれていたため、宋朝がこれを禁止しようとしたことが述べられている。宋朝は翌年八月には死罪を以てこれに臨むこととし、約二〇年を経た太平興國八年（九八三）十一月になって「棄市」は除かれて律に従って罰することとした。この時期にこのように厳しい禁令が出されていることの意味を明らかにしなければならない。

『長編』卷三一、淳化元年（九九〇）九月戊寅の條には、

川峽富人、多招贅婿、與所生子齒、富人死、即分其財、故貧人多捨親出贅、甚傷風化、而益爭訟、望禁之、詔從其請、とあり、これは貧人の多くが「親を捨てて」すなわち「別籍」して富人の贅婿となり、富人の死後、その財産の均分に與っており、宋朝としては、大家族制の美風を傷つけると同時に、財産相續をめぐる所生子と贅婿との間の訴訟が多くなっ

ているからこれを禁止しようとした、という内容のものである。

別籍異財は後蜀時代以來の慣行であり、贅壻もこの時期に急に始まったのではなく、「與所生子齒」とあるように、子供の頃から富人の家で養育するのであるから、いずれも四川における古い慣行であることは間違いない。また四川だけでなく、同じ十國の一つ劉氏の南漢においても別籍異財が行なわれており、宋朝の禁止にもかかわらず、財産相續をめぐる訴訟が絶えず、十一世紀初めに再び禁令が出されるに至っている。また別籍異財は特にこの時期においてのみ行なわれた慣行ではなく、中國史を通じて見ることができ、「同居同財」の美風に反するものとして王朝國家としては表面上はつねに禁止しているものである。しかし宋朝がこの慣行に敢えて死罪を以て臨み、或いは贅壻が王小波・李順の亂の發生直前に禁止されていること、また四川地域の全體的な經濟環境の變化を考慮するならば、このような事態は、宋初の四川における豪民と小民との間における土地所有のあり方の問題として扱うべきであろう。財産相續の問題そのものについてここで詳しく考察する餘裕はないが、別籍異財が特に商品經濟が発達して中小農民の自立傾向の強い地域で行なわれる慣行であること、贅壻が富人の死後、所生子との間に財産相續をめぐる争いを起こしていることなどから、基本的には中小農民の土地所有權の擴大の方向を示しており、豪民による大土地經營の展開とは逆の方向にあることを確認できよう。

「巴蜀民、以財力相君、每富人家、役屬數千戶」「旁戶素役屬豪家民、相承數世」といった四川における豪民と旁戶との關係は、豪民とその旁近の戸との間で擬制血縁紐帶をも利用した貧人たちの土地所有の擴大が持續的に行なわれ、新たに田土を獲得した貧民たちと豪民との間に、本來は豪民のものであった田土を媒介として、數代にわたって繼續している佃作關係を示しているようである。「役屬」は基本的には田土を媒介とする關係を基礎に成立していったと思われる。

(三) 「大蜀國」の限界

ここでは、李順による「大蜀」建國以後の狀況を見ることとする。

反亂は李順の成都入城において頂點に達した。黃休復の『茅亭客話』卷六、金寶化爲煙の項に、

蜀州江源縣村毗王盛者、凶暴人也、與賊王小波・李順爲侶、甲午歲（淳化五年）據益州、授岷、補儀鸞使、領子弟百餘人、虜掠婦女、剽劫財帛、殺人不知紀極、驅迫在城貧民、指引豪家收藏地窖、因掘得一處古藏銀、皆笏錠金、

とあり、蜀州江源縣の農民王盛は王小波・李順とともに決起し、成都入城後に儀鸞使に補せられ、貧民に對して「均貧富」を實行しており、同じく卷六、艾延祚の項には、

成都漆匠艾延祚、甲午歲爲賊所驅、於郡署令造漆器、

とあり、都市手工業者に對する對策も打ち出されていたらしい。また、李順は自己の直屬の軍隊を持ったらしく、これは改元した年號「應運」にちなんで「應運雄軍」と命名された。『宋會要』刑法四、配隸、天禧四年六月十六日の益州路安撫使呂夷簡の言に、「淳化五年、西川有從草寇刺面、充應運雄軍百姓」とあるのがそれである。『長編』卷三六、淳化五年五月丁巳の條には宋朝軍が李順を獲えた時の記事として、

順方欲盡索城中民、黥其面、以隸軍籍、前一日城破、民皆獲免、

とあり、李順が自己の軍隊の増員をはかろうとしたことを述べている。

しかし李順の勢力はこのころすでにかなり衰えを見せていた。部下に二〇萬の勢力を率いさせて劍門・梓潼、それに巫峽を固めたことは前章で見たとおりであるが、これらはやがて王繼恩・馬知節らの率いる壓倒的に優勢な宋朝軍に打ち破られ、二月には劍州、四月には綿州、ついで閬州・巴州へと敗走を重ね、五月には成都が陥落した。李順は捕えられ、鳳翔の市で處刑された。この後、部下の張餘が成都附近で衆を集めて江水を下り、嘉州・戎州・瀘州・渝州・涪州・忠州・萬州・開州の八州を次々と攻略したが、巫峽から攻め込んできた官軍に追ひ散され敗れ去った。

このように王小波・李順の亂において、實際に戦闘が行なわれた時は成都府路における「大蜀」建國の時期と、李順の派遣した、或いは張餘が江水に沿って下った軍勢が官軍と衝突した時期とに分けることができる。が、地域を見ると、王

王小波・李順の亂が、實質的には全四川の規模へと擴大し切っていないことを示している。

また、この時期には、郭氏・曹氏・常氏等、宋朝に仕官している成都附近の豪民が「郷黨を率いて」或いは「土軍を率いて」反亂の鎮定に協力している。^④「大蜀國」はこうして滅ぼされ、各地に離散した農民たちは、或る者は山谷に潛伏して官軍に抵抗し、多くは罪をゆるされて歸農せしめられた。

王小波・李順の亂は、成都附近の、かなり主戸率の高い、産茶地を中心とする諸州で發生し、豪民は旁戸とともに亂に加わった。亂に際しかれらは民兵集團を組織していたらしい。豪民たちは民兵集團を統率する形で李順に呼應し、宋朝支配からの獨立をめざそうとした。かれら豪民は宋初以來、在地土豪としての經濟的・政治的優位を次第に低下させてきており、鄉村においては自らの負擔を「旁戸」など中小農民に轉嫁させていった。豪民が旁戸らとともに民兵集團を組織したのは、一面ではかれらの在地支配の危機を反映していたからではなかったろうか。王小波・李順の亂が宋初以來、主戸率の高い成都府路を主な舞臺としており、また「大蜀國」が短命に終り、實質的に全四川化しえなかったのは、宋朝軍の強力な軍事力に壓倒された面とともに、成都府路における豪民による旁戸の統制力が結局はそれほど強固なものではなかったことを示している。それは、すでに豪民と小民との關係の内部において、小民たちの土地所有權が擴大する傾向にあり、農民たちの歸農とともに、成都府路では中小自作農の増加が支配的となり、かれらの土地所有權はますます擴大してゆくという、次章に述べる事態がそのことを證明していると思われる。從來、その「古さ」或いは「身分的隸屬の強さ」の面において評價されてきた王小波・李順の亂、及びそれに加わった「旁戸」は、實際には宋初四川における農民の成長を示す「新しさ」の側面を多分に持っていたように思われるのである。

三 反亂後の土地所有の展開

王小波・李順の亂鎮定ののち至道二年（九九六）に「制置劍南・峽路諸州旁戶」という詔が出された背景には、鄉村の治安維持をはかるという面と同時に、反亂に加わって土地を離れた多くの旁戶たちを、再び豪民の統制の下で耕作に従事させ、兩稅收入を確保しようとする宋朝の意圖が働いていたと思われる。この詔が出される前年、至道元年（九九五）六月には、

應諸州管內曠土、並許民請佃、便爲永業、仍免三年租調、三年外、輸稅十之三、

という詔が出され、全國的に荒田の開墾が勧められ、「三年の租調を免ずる」特典があったのであるが、同じころ四川においては、とりわけ成都府路にあっては状況は異なっていた。『河南先生文集』卷一二、宋太子賓客分司西京謝公行狀記には、

〔謝壽〕權知益州之華陽、蜀民流散之後、田廬荒廢、詔書、凡入租占田、有能倍入租者、斷以新籍、於是豪右廣射土田、貧民歸者、多亡其素產、公曰、此權時之制、欲就業耳、芳利其倍租而使下民失業、豈經制哉、乃命盡還舊主、所施行、與詔書異、

とあり、宋朝への租の倍入を條件に亂で荒廢した土地の占有の獎勵が行なわれている。この記事の前半分は豪民による占田の進行の状況を述べているのであるが、宋朝の意圖が王小波・李順の亂で荒廢した田土の開墾を租入の確保の目的から獎勵したことは間違いない。しかし注意すべきは後半部分である。權知華陽縣謝壽は、これは流散した農民たちを舊業に歸らせるための措置であるとして、詔意に反して占田をやめさせ、盡く舊主に還させたのであって、素產を失った貧民たちが、亂の前に持っていた所有權を回復したことが述べられている。この頃には知益州張詠が「便宜從事」を與されており、華陽縣ではこのような事態が生じたのである。

この華陽縣における、この時期の土地所有關係の展開を知る貴重な資料である『成都文類』卷三九、楊天惠「正法院常住田記」を紹介せられた丹氏は、この附近にあった舊後蜀節度使田欽全の所領であった一萬畝にのぼる廣大な田地をめぐ

り、その正當な所有權を主張する正法寺と耕作している農民たちとの抗争の中から、たくましく成長する四川の佃戸の存在を指摘されたが、周藤氏はこの附近の土地は豪民が開墾したものであるとされ、兩氏の見解は對立したままになっている。兩氏の見解のちがいをここで全面的に検討するつもりはないので、本稿との關連において重要と思われる部分だけを「正法院常住田記」から抜書することとする。

升平寔久、生齒漸繁、人棄刀劍、市錢鑄、相與墾田修穡事、以故曩時飢饉之區、莠在草者、類澤澤就開墾、初得新田三千七百七十三畝、而佃甿之老身長子者、妄主名竊有之、而府縣覈實、迺獲隸寺、然地之未入者、參半不翅、自慶曆距元豐、執耜日以衆、闢壤日以廣、蓋又得美田四千七百七十三畝、而旁近計伍、侵蝕如故、調加巧焉、

ここに見える「佃甿之老人長子者」を周藤氏は豪民であつたとし、丹氏は旁戸のような佃戸であつたとされる。また、周藤氏は「人棄刀劍」とあることにより、これらの土地は眞宗期の平和な時代に武人の子孫——豪民——が「妄主名竊有之」すなわち他人の名義で所有していたのであるとされる。しかし「人棄刀劍」と言う表現は、王小波・李順の亂に加わつた農民たちの歸農を示しているとも考えられるし、「妄主名竊有之」というのも、草野靖氏のように「妄に主名し（所有し）、之れを竊有す」と讀むことも可能である。謝濤のとつた措置は、「租を倍入する」ほどの資力はないけれども、もとの所有者（舊主）である中小農民（貧民）の所有權が、すでに亂の以前から確立していたことを前提としている。しかもかれら「佃甿之老身長子者」たちによって、正法寺の主張する田土所有面積の約半分——四千畝程度——は所有されていたのである。「旁近計五、侵蝕如故」という慶曆以後の狀況も、かれらの所有權下における耕作の進展を物語っている。

王小波・李順の亂が成都府路において發生したこと、成都府路の農民を中心としていたことは先に見たとおりである。この亂は、土地所有權の確立している中小農民——旁戸も含めて——の成長の過程において、かれらの獲得している零細な土地から得られる茶など商品作物の販賣利潤が、宋朝から直接收奪されようとしたことが原因となつて發生し、また同じ宋朝からの直接收奪であつたという點で大經營者たる豪民とも共通の利害を有していた。一見強固に見える「役屬」關係

も、豪民と旁戸との間の佃作關係を基礎に、豪民から時々の勞役負擔を課せられていることを示す程度の表現であらう。亂後における土地所有の展開は、亂の發生前における土地所有關係の延長線上にあり、その基本方向は中小農民の所有權の擴大であつたと言えよう。

おわりに

十一世紀の四川における土地所有關係において、亂の發生以前と比較して特に目につくのは、田土の所有權をめぐる訴訟が多いことである。『宋會要』食貨一、農田雜錄、天禧二年（一〇一八）二月の條に、梓州黃昭益・遂州滕世寧の言として、

川界多爭論、追贖遠年典賣莊土、及至勸誥、皆于業主生前以錢典市、及業主戶絕、本人不經官自陳、便爲己業、直至鄰里爭訟、方始承伏、出錢估價、

とあり、「戸絶田」の所有をめぐる爭訟を傳えている。また眉州において、同族内部における土地所有權をめぐる争いに州縣官が買収されて三〇年も解決しなかつた例や、果州において契約書類を官に出さずに田宅を典賣した例、綿州において兄弟の間で田土を争い一〇年も解決を見なかつた例など、十一世紀初めの二・三〇年間に田土訴訟が集中して起つてゐるようである。資料の制約を一定考慮に入れなければならないのは當然であるが、田土所有權をめぐる争訟の具體例の増加は、亂後の四川における特徴としてとらえてよいであらう。

主戸の増加傾向は、成都府路のように耕地面積に比して人口の多い地域にあつては、『淨德集』卷一四、蜀州新堰記に西南雖號沃壤、然賦歛出於百農、耕夫日夜劬勞、而有三時餒色、百畝之家、名占上籍、歉歲或不免饑、
といひ、或いは『長編』卷一六八、皇祐二年（一〇五〇）六月の條に

蜀民歲增、曠土盡闢、下戸才有三五十畝、或五七畝、而贍一家十數口、一不熟、卽轉死溝壑、

というような、數十畝の田土で一家十數人を養わねばならない零細な上等戸や下等戸を生み出している。ちなみに「蜀州新堰」は熙寧七年（一〇七四）に竣工したもので、新堰の完成によって「凡溉田三萬九千畝、瀕側之民、安粒者無慮五千家也」といい、文字どおりにとれば、一家あたりの耕作面積は約八畝ということになり、これは一家で生計を営みうる最低限の田土面積である。耕地の狭い成都府路を中心とする地域では、文同の『丹淵集』卷二三、武信杜氏南園記に在蜀、土田險陋、民屋繁會、得平地若頃許、愛惜摩撫、分溝裂畦、種種蒔植其間、冀四時孕利、出沒相屬、というように、土地の集約的・多角的利用によって零細な耕地であっても最低限の生計維持が可能だったのである。

成都府路諸州に多い茶園戸のように、これが單一栽培の形態をとった場合、販賣利潤を奪われて直接宋朝の収奪下に置かれるような事態——王小波・李順の亂の發生の原因となった「販茶失職」の事態——が起った場合、かれらがいかなる状況に置かれるかは明らかであろう。

王小波・李順の亂の性格は、このような四川、中でもいわゆる「狭郷」で發生したこと、商品作物栽培で生計を営む茶園戸を中心としていたこと、主戸の増加傾向の過程で發生していること、などの點をふまえた上で把握し、さらに、十世紀末から十一世紀にかけての時代が、あらゆる面で宋朝の支配體制の確立期であり、流動性に富む時期であることを考慮に入れながら、新たに検討を加える必要があると思われる。

註

① 重松俊章氏「宋代の均産一揆と其の系統」（史學雜誌四二—一八）。

ただ氏のように南宋の鍾相・楊公の亂と王小波・李順の亂とをその「均産」思想の共通性という點において同列に論じうるかどうかは疑問である。王小波・李順の亂は、宗教イデオロギーの要素を最初から全く表面化させていない點できわめて特徴的である。

現實的なスローガンという點を重視してこの亂の歴史的意義を高く評價したのとして、侯外廬氏「唐宋時代の農民戦争の歴史的

特徴」（東洋史研究二三—一）がある。

② 池田誠氏「均産一揆の歴史的意義——九—一〇世紀における變革の一問題——」（歴史學研究一五二）。但し氏においては莊園領主制、封建領主制の概念規定は不明確である。

③ 丹喬二氏「宋初の莊園について——成都府・後蜀國節度使田欽全の所領を中心として——」（史潮八七）。

④ 周藤吉之氏「宋代四川の佃戸制——最近の研究を讀んで——」（『唐宋社會經濟史研究』所收）。

⑤ 柳田節子氏「宋代土地所有に見られる二つの型——先進と邊境——」（『東洋文化研究所紀要』一九）。

⑥ 佐藤和弘氏「王小波・李順の亂と唐宋變革期の性格」（『中國農民戰爭史研究』第一號所收）。中村健壽氏「王小波・李順の亂における反亂集團の構成」（同第二號所收）。なお王小波・李順の亂については戰前、張蔭麟「宋初四川王小波・李順の亂——失敗の均產運動——」（『清華學報』二一八）があり、また「中國農民起義論集」（一九五八年、北京、生活・讀書・新知三聯書店）には楊威民・任樹明「北宋初年王小波・李順起義」を收める。

⑦ 本稿は、紙數の制約もあり、王小波・李順の亂の性格規定に新たな視點を付加することに重點を置く。宋代の地主佃戶制の展開を中國史上にどのように位置づけるか、という問題について研究者の間に共通の認識を確立し得ていない現在の研究狀況は、研究史の體系的整理をすら複雑で困難なものとするが、宋代地主佃戶制に關する從來の論争の對立點を要約したものととして、草野靖氏「宋代民田の佃作形態」（『史艸』一〇）、及び岩波講座「世界歴史」九所收の同氏「大土地所有と佃戶制の展開」のはしがきの部分を参照されたい。

⑧ 『皇朝編年綱目備考』卷四、淳化四年二月己未の條、『宋史』太宗紀、同年同月丙戌の條、同、卷二七六、樊知古傳、『隆平集』卷二〇、削平僭偽、その他『宋朝事實』『通鑑長編紀事本末』等は王小波・李順らは「青城縣民」であつたとし、『宋史紀事本末』だけが「青神民」としており、青神縣は眉州の屬縣であるが、恐らく青城の誤りであらう。また、『夢溪筆談』卷二五、雜誌二には、「李」順、本味江王小博之妻弟」とあるが、味江は

青城縣の付近の案名であり、產茶地でもある。王小波は王小博、または王小驥とも記すこと、『宋景文公筆記』卷上參照。

⑨ 加藤繁氏「支那に於ける主要産業の發達について」（『東亞問題』一一〇）、金井之忠氏「唐の茶法」（『文化』五一八）參照。

⑩ 『續資治通鑑長編』（以下「長編」と略稱）卷三六六、元祐元年二月癸未條、右司諫蘇轍の言に「臣聞、五代之際、孟氏竊據蜀土、始有種茶之法、及藝祖平蜀之後、放罷一切橫斂、茶遂無禁、民間便之」とある。

⑪ 『十國春秋』卷五三、後蜀六、毋守素傳。

⑫ 『文獻通考』卷四、歷代田賦之制、開寶六年の條に「是歲令川峽入戶、輸納兩稅以上錢帛、貫收七文、匹收十文、絲綿一兩・茶一斤・稗草一束、各一文、頭子錢數、始略見於此」とある。幸徹氏「北宋頭子錢の展開過程に就いて」（『東洋史學』二二）はこの記事に觸れていないようである。

⑬ 『淨德集』卷一、奏具置場買茶施行出賣遠方不便事狀に「兩川所出茶貨、較北方東南諸路、十不及一」とあり、北方は佐伯富氏が『宋代茶法研究資料』において校訂せられたとおり於の誤りである。なお、宋代四川の茶業に關しては河上光一氏「宋代四川における種茶法の開始」（『東方學』三三輯）に多く依つた。

⑭ このような短期間の季節勞働者に關しては、柳田節子氏「宋代の客戶」（『史學雜誌』六八—四）に指摘がなされている。

⑮ 四川が四路に分けられたのは反亂直後の咸平四年（一〇〇一）のことであるが、四川内における地域差を示すものとして、宋初においてもこの呼稱を便宜上使用することとする。成都府路はほぼ唐・五代・宋初の劍南西川に相當する。北宋初四川四路の諸州

の主・客戸數の動態に關しては、佐竹靖彦氏「宋代夔州路の民族問題と土地所有問題」(上)(史林五〇一六)を参照されたい。氏はこの中で、「成都府路では主戸の増加が生産力の發展を制度的に反映するものであったろう」とされている。

⑮ 『宋太宗實錄』卷七八。『通鑑長編記事本末』卷一三。以下、王小波・李順の亂の經過に關する資料からの引用は、註⑧に掲げた諸史料にあまり異同がなく、また煩雜になるのを避けるためであつて、特に必要な場合を除いては出典を明記しない。

⑯ 『宋會要』刑法二、禁約にも、これと同内容の記事があり、若干の字句の異同があるが、特に問題となる點はないので省略する。

⑰ 丹氏(註③前掲論文)は旁戸が兩税を負擔していたとし、周藤氏(註④前掲論文)は兩税を負擔したのは豪民であつて、旁戸は文字どおり小民で奴隸の如く使役されている客戸であるから耆長にはなり得ない、とされる。

⑱ 註②前掲論文。

⑲ 註⑥前掲論文。

⑳ また、氏のいわれる新しい「封建領主」を「皇朝編年綱目備考」卷四、淳化四年二月己未の條に見える「兼併者」の一語によつて説明するのは無理なようである。

㉑ 松井秀一氏「唐代後半期の四川―官僚支配と土豪層の出現を中心として」(史學雜誌七三一一〇)。栗原益男氏「唐末の土豪在地勢力について―四川の韋君靖の場合―」(歴史學研究二四三三)。日野開三郎氏「唐韋君靖碑の應官諸鎮案節級に就いての一考察」(『和田博士古稀記念東洋史論集』所收)。

㉒ 『資治通鑑』卷二五七、文德元年(八八八)六月の條に「王建軍新都、時綿竹土豪何義陽・安仁費師勲等、所在擁兵自保、衆或萬人、少者千人、建遣王宗瑤說之、皆帥衆附於建、給其資糧、建軍復振」とある。

㉓ 『北夢瑣言』卷四、趙師儒與柳大夫唱和の條に「唐柳玭大夫之任瀘州、泝舟經馬騶鎮、土豪趙師儒、率鄉兵數千、馮高丘寨、刑訴生殺、得以自守、本道署以軍職」とある。

㉔ 註㉒参照。

㉕ 『十國春秋』卷四八、後蜀一、乾興元年(九三〇)冬十一月の條に「〔孟〕知祥命都押牙高敬柔、帥資州義軍二萬人、築長城」とあるのは義軍が、軍閥權力に使役されていることを示すものと思われる。

㉖ この時期については勾延慶の『錦里耆舊傳』、及び『長編』卷六等を参照。

㉗ 『宋太宗實錄』卷七八、雍熙二年八月の條。

㉘ 『宋史』卷三〇九、楊允恭傳。

㉙ 『慶元條法事類』卷四七、賦役門、違缺稅租に「形勢戸」の説明をして「謂見充州縣及按察使吏人・書手・保正・耆戸長之類、并品官之家、非貧弱者」とあり、さらに形勢戸は朱字して一般の版簿と區別する旨を述べる。

㉚ これが銅錢の四川流入を禁じた後蜀の經濟政策によつて示されることは先に見たとおりである。

㉛ また全國的に見ても、徭役の均等化のため戸等を九等級に分けたのは太平興國八年(九八〇)であり、五等戸版簿が作成されたのは明道二年(一〇三二)のことである。なお、戸等制について

は曾我部靜雄氏「宋代初期の役法、三、宋代戸の等級」（『宋代財政史』所收）、及び柳田節子氏「宋代の下等戸について」（『東洋學報四二（一）』参照）。

③『長編』卷八、乾德五年四月戊寅の條。

④『宋會要』食貨七〇、賦稅雜錄、開寶四年正月の詔。

⑤『長編』卷七三、大中祥符三年（一〇一〇）四月戊寅の條に「川界弓手役戸多貧乏、困於久役、州縣抱常制不替、以至破壞家產、況第一・第二等戸充耆長・里正、不曾離業、卻有限年、弓手係第三等戸、久不許替、深未便安」とあるのが四川における戸等にもとづく職役負擔の初見である。

⑥『夢溪筆談』卷二五、雜誌一。

⑦『長編』卷一〇、開寶二年八月丁亥の條、及び同卷二七、太平興國八年十一月癸丑の條。なお律によれば、別籍異財の罰は「徒三年」である（『宋刑統』卷二二、戸婚律）。

⑧池田氏はこのような習慣は宋朝支配に對抗する四川の豪民や貧民が新たに創出したものとされるが、『宋會要』刑法一、禁約、乾德六年六月十一日の詔には、『長編』のさきの詔と同内容の記事を載せ、その續きに「不得更習舊風」とあるので、これが後蜀時代の慣行であったことがわかる。

⑨『宋會要』刑法二、禁約、天聖七年五月十一日の桂州の言に「按偽劉日、凡民祖父母父母在、子孫始娶、便析產異爨、或敏於營度、資業益盛、或惰不自修、田畝荒廢、其後尊親淪逝、及地歸中國、乃知朝廷編敕、須父亡歿始均產、因朋發計、以圖規奪、或鄉黨里巷傭筆之人、替爲教引、借詞買狀、重請均分、泊勾捕證佐、刑獄滋彰、或再均分、遂成忿競、故每新官到任、動須論訴、

游手之輩、僥倖實多、勤懇之民、冤抑無告、請限乾興元年正月一日以前、凡廣南民、若祖父在日以產與子孫者、悉以見佃爲主、不在論理之限、詔如所奏、仍以敕到日爲限、其限後若祖父在而別籍者、論如律」とある。これと同様の事態が、宋朝征服後の四川においても起つたであろうことは容易に推測できよう。

⑩仁井田陞氏『唐宋法律文書の研究』第十三章、家產分割文書（分書）を参照。

⑪費著の『成都氏族譜』郭氏の項に「郭仁渥、當順賊亂、率鄉黨保別墅、獲免」とあり、『宋史』卷二七二、曹克明傳には、曹氏は「衆數萬人を募つて」宋朝軍を迎えた」とあり、『淨德集』卷二四、尚書屯田郎中致仕常公墓誌銘には「能與衆捍之、盜不敢犯、又能率土軍、迎王師以從、討活汙染者千人」とある。

⑫『宋會要』食貨一、農田雜錄。

⑬これと同内容の記事は、『宋史』卷二九五、謝絳傳や『范文正公集』卷一一、宋故太子賓客分司西京謝公神道碑銘等にも見える。

⑭草野靖氏「宋代民田の佃作形態」（『史艸一〇』第三章参照）。

⑮『長編』卷八二大中祥符七年（一〇一四）五月戊子の條、同六月丙辰の條、及び同卷九〇、天禧元年（一〇一七）六月の條に、この間の經過が見える。

⑯『宋會要』食貨一、民產雜錄、天聖五年（一〇二七）二月の條に「果州同判李錫言、本州典賣田宅、多不問親鄰曾不書契、或即收拾……」とある。

⑰『丹淵集』卷三九、太子中舍王君墓誌銘に「綿州百姓馮仁美兄弟、訴田十年、不能決公」とある。また同卷二三、梓州中江縣樂

閑堂記は、十一世紀中ごろの状況を傳えて「中江、梓三萬戶縣、生齒既繁、分地既陋、其爭鬭之辯、侵越之訴、番已遽作、紛午交衍」とあり、このあたりの田土がすでに開墾しつくされ、争訟が絶えないことを述べている。

④ 全國的にみても、眞宗・仁宗の時代はいわば宋代的な土地所有關係の基礎が確立してゆく時期として把えうる要素が多く見られるようである。宋代史においてこの時期のもつ歴史的意義については別の機會に論じるつもりである。

東洋史研究叢刊之二十三

東洋學研究——歴史地理篇

森 鹿三 著

A5判 本文五四三頁
定價 四千圓

森博士の四十年にわたる多方面な研究業績のうち、そのもつとも専門とせられる中國歴史地理關係の論文を集めたものである。秦漢以前の古代地理と水經注を中心とした諸論文のほか、中國歴史地理入門、中國地志概観などの啓蒙的なものもおさめた。本書は中國歴史地理の概論、特論であるとともに、その研究法を示したものといつてよいであらう。

要 目

竹と中國古代文化 晉・趙の北方進展と山川の祭祀 李峪村について 支那古代における山嶽信仰 日月の出入する山々 唯水史觀 水經注に引用せる法顯傳 戴震の水經注校訂について 十道志に引用せる水經について 水經注に引用せる史籍 最近における水經注研究 鄭道元略傳

右書御希望の方は本會までお申込み下さい

京都市左京區吉田本町 京大文學部内

東 洋 史 研 究 會

振替 京都 三七二八番